

「人口減少社会の中で大分が生き残る方法」③

翻って、九州と大分に目をやれば、九州は福岡市一極集中、大分は大分市一極集中となっている。しかし歴史的にも九州政府は太宰府だったし、豊後政府は府内だったのだ。

した商業や手工業が成立する地域のみだった。これも権力の大きさや信仰の大きさ、交通量の多さで街の規模も様々で、やはり江戸、大阪、京都が巨大な街だった。

明治維新から今年でちょうど150年だが、この時から日本の産業構造が大きく変わり始めた。ようやく日本に産業革命が入って来たのだ。製造業の爆発的拡大で、工場が農村の人々を大量に飲み込み始め、工場立地地域に人口が集中し始めた。そして製造業を軸として商業も爆発的に拡大していった。個人所得も法人所得も激増して、巨大都市が出現し始めた。この流れがついに30年くらい前まで続いていたのだ。その間に戦争もあった。70年前の敗戦は、日本を焼き尽くしたが、それまでは日清、日露等の戦争が産業隆盛を猛烈に牽

引していた。戦後も朝鮮戦争の為に占領国アメリカの方針で産業強化が進み、戦争特需と相まって日本は急速な復興と高度成長期を迎えた。この150年間に戦争を挟んでも人口は3倍近くに激増したのだ。

今でも国土の大宗を占める農漁村は、大都市近郊や生産性の高い農漁村地域は今後の成長も見込めるが、それ以外の地域は更に急速な人口減少に見舞われると予想される。九州の農地は東京や三大都市圏から離れ、東北や北海道の生産性に及ばぬ為、かなり厳しいだろう。

人口の分布は産業構造が決めている。弥生時代は農耕と共に生まれてきたとも言われるが、その頃からつい最近まで、産業の中心は圧倒的に農業だった。時代と共に耕地面積は広がってきた。水耕適地の平野から、中山間の棚田へ、干拓地へ、灌漑地へと拡大し、耕地の広がりが人口の広がりに繋がった。ただ耕地の単位面積当たり生産量は時代と共に高まりつつも、何処でもほぼ一定なため、人口も耕地面積当たり一定数で分散していた。人口が集中するのは、政権城下や寺社門前や交通要衝の市場などで、安定

30年程前から時代は徐々に大きな節目を迎えてきた。少子高齢化、人口減少、製造業の国際競争力低下と産業のサービス化、高度情報ネットワーク化とユビキタスコンピュータ化とエンタメ、世界の多極化などだ。従来の常識と感覚が全く通用しない時代が始まったのだ。嘆いても時代は逆流しない。幸福への道は、新しい時代の新しい事態に順応し、適切に対処することだ。若い世代ほど順応性が高いのだから、これからは若い人達に我々は教えを請わねばならないだろう。

福岡市は今後も拡大し、熊本市、大分市、鹿児島市、鳥栖市は規模を維持するだろうが、それ以外の都市は縮小する。規模が小さい街ほど急速に縮小する。九州都市の大宗が製造業比率が非常に低く、農林水産業比率が高いからだ。大分県は製造業比率は九州で最も高いが、全国的には低位だ。

Facebookでも活動報告を行っています。(Facebookアドレス) <https://www.facebook.com/anamiyoichi>

皆様のご意見をお聞かせください!お待ちしております。

あ な み よ う い ち

衆議院議員

穴見陽一

後援会
事務所



〒870-1133 大分市大字宮崎867-18 TEL.097-567-1319 FAX.097-567-2010

<http://www.anamin.net> E-mail:info@anamin.net